同和問題学習と私～３年Ｂ組とともに～

３年Ｂ組担任　　豊田　淳子

１．学級びらき

昨年度から引き続きこの学年の担任をすることになった。生徒一人ひとりが，新しく見え緊張している自分自身をあらためて確認した。今年は生徒指導に加えて進路指導という大きな使命があり，昨年までの取り組みでは甘いと自分自身反省をした。それに加えて同和問題学習がある。正直なところ私には重荷であると感じていた。差別者である私が教壇に立ち，生徒たちに語っても何の説得力もなく，胸を熱くするものがないのではないかと弱気であった。４月当初に学年部会が開かれ，各クラスが行う全体学習の日程が決まった。３Ｂは11月25日６クラスのうち最後の全体学習となった。６クラスのうちトリをつとめることになったのである。私にやれるのだろうかと不安と心配で，胸が一杯になったのを覚えている。

あれから一年の月日が流れた。あっという間の一年間であった。しかしその中には数え切れないほどの生徒とのかかわりや出来事がある。一つ一つを振り返り，心の中にまた新たに積み重ねていきたいと思う。

２．思いおこせば

大学を卒業し，私は２年間講師として高等学校に勤めていた。全く同和問題学習には無縁という感じで過ごし，恥ずかしい話であるが中学校の教師になって初めて学習会の存在を知ったのである。同和地区という言葉は知っていたが，自分とは何ら関係のないものであると決めつけていた。思いおこせば，私が同和問題学習の授業を受けたことを覚えているのは，中学２年生の時だけだ。あの時も自分とは全く関係のない世界の出来事であり，優等生らしい答えしか出せなかった。私が生まれたところは同和地区があったため，「○○という名字は地区の人だなあ」とか「○○町は地区があるから怖いのよ」などのうわさ話を耳にすることがあり，私の心の中に自然と同和地区の人は自分たちとは違う人間で，怖いことを平気でするものだと植え付けられていた。中学校から高校へ進学をし，クラスの中には何人か地区出身の人がいたと記憶している。高校へ入学して数日後，こんな放送があった。「○○さん○○さんは放課後○○先生のところまで来て下さい」と。その時「同和地区の子ばかりだな」というひそひそ話が耳に入った。私は「ああ，あの子は地区の子だったのか」と思い，何だか自分が一段高い所に立っているように思えた。こうして自分は同和地区に生まれなくてよかったと心の中で思い，高校生活３年間を過ごした。

３．前任校

前任校は大きな同和地区があり，クラスの半数近くの生徒が学習会に通うという状況であった。学習会だよりは帰りの学活の時にみんなの前で手渡すことになっており，昼休みの学習会の放送も盛んであった。しかし，生徒側からしてみればどうであろうか。みんなの前で渡される学習会の通知。心から地区に生まれたことを誇りに思って受け取っていた生徒がいただろうか。同和問

題学習の授業も，差し障りのない一辺倒な発問しかできず，私の本音を語ったことがなかった。地区に生まれた人々の苦しかったことや，血を吐くような悲しみを生徒に教えただけだったように思う。ただマイナス面しか生徒に与えなかったのではないかと反省させられる。熱くなる同和問題学習の授業を受けさせることができなかったと思うと，あの頃の生徒に，心からすまない気持ちで一杯になる。

４．結婚

私は恋愛結婚なので釣り書の交換はなかったが，主人の母親が実家の近くまで聞き合わせに来た。大事な息子の嫁になる私のことを知りたかった気持ちはよくわかるが，何だか複雑な気持ちになったことをはっきり覚えている。しかし，釣り書の交換や聞き合わせなどは世間の常識となっており，不思議に思う人はまだまだ少ないのが現実である。また結婚するにあたり友人からこんなことを言われた。「板野の人だろ。板野って地区が多いだろう。地区の人でないの」と。私はすぐ「違うよ」とだけ答えた。もし主人が同和地区の人だったら当時の私はきっと結婚にふみきれなかったと思う。主人はそんな差別心のある私を見抜いてある日こんなことを言った。「もしお前が地区の人でも僕は結婚すると思う」と。その時私は人間の価値とはなんだろうと考えた。学歴でも家柄でもない。信じ合う心，支え合う心があったら生きていけるんだということがわかった。今でも主人は同和問題学習についていろいろアドバイスをしてくれるし，同和問題について夜遅くまで２人で語り合うこともある。正しいことは何か。それに焦点を合わせ，違った意見でも接点を見いだす努力。それが私の同和教育観の確立への第一歩だと感じた。

５．Ａ子の発言から

第２回の全体学習の時，３ＢのＡ子が「私は学習会に行っています。学習会の通知を先生から渡されることがとても楽しみです。」と発言した。私はカーッと熱くなり，自然と右手が上がっていた。心がふるえていた。自分で何をしゃべったかわからなかった。ただＡ子に応えなければと必死だった。うまく私の気持ちが伝わったか不安だったが，次の日あゆみに「先生が私に続いて発言してくれたのが，とてもうれしかった。」と書いてあった。同和問題学習を通して，こんなにうれしかったことは今まで一度もなかった。この日から私の同和問題学習に対する取り組み方が変わっていった。部落差別のために苦しんでいる生徒を目の当たりにして，教師として，いいえ一人の人間としてどうにかしなければと思うようになった。でも今の自分に何ができるのだろうかと，自問自答してもはっきりした答えは出ず，ただ同和問題学習の時間ひたすら自分のことを語ることから始めようと思った。

「先生は差別者でした。いいえ，今でも差別者だと思います。この自分の中にある差別心を洗い流すために先生はあなた達とがんばっていきたい」と教壇から生徒に投げかけた。私のこの言葉を聞いて，クラスの何人かが手を挙げ発言しだした。やっと一歩ふみだしたと思った。しかし峠を越えるにはまだまだ時間がかかる。３Ｂ３５名と一緒に楽しいことも，苦しいことも味わっていく覚悟ができた。

６．全体学習によせて（生徒の感想より）

『部落差別は本当に自分の心の中にあるのです。私はそれを聞かされたとき納得しました。部落差別というのは人の言ったことが私の心の中に段々流れてきて，心のなかに芽ばえてくるんだ。一人一人が助け合って，心が平等という事で通い合ってこそ差別がなくなるんだ。今私たちにできることは全体学習で発表して意見を深めていくことだと思います。』

『私は今日の全体学習で思ったことがあります。それは板中の生徒でよかったということです。とてもいい先生に囲まれて，私たちのことを本当に考えていてくれるんだなあと思いました。私は高校に行ってつぶされそうになっている先輩がいると聞いてショックでした。中学校にいるときのことは何だったんだろうと思いました。私も今のままではつぶされてしまう立場になると思うからがんばりたいです。私のまわりの友達は本当にがんばっているので，友達に応えていけるようにしたいです。でも，全体学習でやっぱり手を挙げるのは勇気もいるし，今まで挙げようと思ってもできなかったので，今の私の目標はみんなの前で自分の意見や本音が言えるようにがんばりたいです。』

『今日６校時に森口先生の顔を見るのがすごく怖かった。発表できない自分だから，発表している人をじっと見れなかった。』

『今日全体学習でした。体育館の中はたくさんの人の熱気でムンムンしていました。途中で雨が激しく雨が降り出しました。その時Ｙさんがこの雨は差別される人の涙です。みんな発表して下さいと言ったところがすごく心に残って，発表できなかった私はすごく恥ずかしかった。』

『私は全体学習では発表できないけど，家とかでは差別解消にがんばろうと思います。』

『私は将来数学の先生になれたらいいなと最近思い始めました。先生になったら今の板中の先生方のように同和問題に取り組めると思うからです。普通のＯＬならそんなことできないと思います。だから私は先生目指してがんばってみたいです。』

『６月15日の全体学習は本当にすごかった。全体学習が始まる前はすごく暑かったけど，途中で暑さを忘れた。でも胸の中には今までで一番熱い気持ちがこみあげてきた。私は一回発表したけれど，手を挙げた時は頭の中では何も考えてなくて真っ白だったのに，立ち上がった時に勝手に言葉が出てくるそんな感じでした。１年の時は頭でいろいろ考えていたけど，３年になって頭で考えるより先に手が挙がっているというふうになった。それだけ私も成長できたんだと思う。』

このように生徒たちは全体学習を前向きに考えている。全体学習で発言するには想像以上の勇気が必要になってくる。ふるえながらマイクを持ち熱い胸のうちを発言する。涙を流しながらの発言が何度あったことだろうか。「部落」という２文字のために１５才の彼らの心がズタズタに切りきざまれていく。ただその地区に生まれただけでどうして差別されなければならないのかと両親につっかかっていった生徒もいた。２年前の私だったら生徒の涙ながらの発言に涙を流すだけだった。その涙も同情の涙だったのではと思う。しかし，今年度の全体学習では私の涙も違っていた。同情の涙から怒りの涙に変わった。この子たちをここまで苦しめる部落差別に対して本気で憤りを覚えた。もし，私がＡ子だったらこんなに強くなれるだろうか。自分が部落出身だと

宣言できただろうか。Ａ子の強さはいったいどこから生まれたのだろう。ある日Ａ子はこう言った。「最初部落出身と聞いた時はショックだった。でも同和問題学習をして，部落出身ということが恥ずかしいものではないということがわかった。私は高校生になってもがんばりたい。」きっとＡ子はがんばれると思う。Ａ子の一言一言が私を励まし，やる気をおこさせてきた。この間も私が学習会の通知を持っていったところ「私がみんなに配ります」と笑顔でやって来た。この笑顔にいつも私は救われる。この美しい笑顔を涙にしてはいけない。そう思った。

７．３Ｂ　全体学習を迎えるにあたり

２学期には板中祭があり，夏休みから演劇の準備をしてきた。３５名もいれば３５の意見があり，なかなか前へ進むことができない状態が続いた。意見を出し合い，どうすればいいか生徒どうしで話し合わせた。弱い立場の者の意見も引き出さなくてはと思い，時間をかけた。本音があちらこちらから出てきた。今にも３Ｂがこなごなに崩れていきそうだった。途中で私が入りまとめようとしたが，「先生は横で見ていてほしい。これは僕たちだけの問題だから」と言われ，じっと待った。待ってよかった。どうにか心が通じあい文化祭を迎えることができた。３Ｂが一つにまとまったのである。ここまでくるにはいろいろなことがあった。何人かの人が傷ついた。しかし，励まし合い協力しあった。支え合うこと，信じ合うことの大切さを演劇を通して３Ｂの生徒は味わったと確信した。

そしていよいよ，３Ｂの全体学習を迎えることとなった。資料読みから始まったが，難しい語句の説明で時間をかけ，なかなか意見交換にはいたらなかった。あせりと不安で，今，生徒たちに何を問いかけていいのか，頭の中が混乱するばかりであった。しかし，３Ｂの生徒たちは次は自分たちのクラスの番だと思い，がんばらねばならないという気持ちがありありと伝わってきた。全体学習の日が近づいてくるに従い，生徒の発言もだんだん多くなり，一時間の授業があっという間に終わってしまうようになった。国語の授業をさいてまで同和問題学習にあててほしいとの要望が，生徒の中から起こってきた。何時間も意見を交換した結果，深く重みのある発言が飛び出すようになった。つい最近までは，同和問題学習の授業が私に重くのしかかり，義務的なものとしか受けとめることができなかった。しかし３Ｂの全体学習を迎えるにあたり，当日はどんな意見が出るか大変楽しみになっていった。指導案は立てたが，指導案はないものだと考え，生徒の意見によって，この授業は展開されていくのである。

そして，いよいよ３Ｂの全体学習の日，朝から緊張していた生徒たちの様子を見るにつけて，今日この日に３Ｂの全部をぶつけるのだと強く言い聞かせた。体育館の中心に席を取り，そのまわりに他のクラスの３年生が，うしろには板野高校の先生方が座られていた。３Ｂのすべての生徒たちの目が私を見ていた。この１時間を意義あるものにするため，がんばろうと誓い合った。私は生徒たちを信じていた。この子たちと差別解消に向けて，１時間燃えようと決心したのである。たくさんの意見が出た。思いを吐き出すように意見が飛び出た。心が熱くなり，生徒と一心同体になったような気がした。今までに最高の授業ができたと自負した。同和問題学習の授業がこんなにも感動を得るものであるということを初めて体験した。教室へ帰った。生徒たちの目が

輝いていた。「先生，今日の授業よかったね。」「〇〇君も発表してくれてうれしかった。」「みんな最高だったね。」と私に話しかけてきた。一年間やってきて本当によかったと思った。彼らと差別解消に向け，熱い心をぶつけ合った11月25日は，一生忘れないと思う。

８．３Ｂ　全体学習感想文より

〇　今日で最後の全体学習となった。でも私にとっては，これからが本番だと思った。今まで全体学習で学んできたことをどんなに生かしていけるだろう。

〇　私は，まだまだ弱い人間だと思いました。自分の感情がうまくおさえることができず，涙を流してしまいます。涙を怒りに変える強い意志，強い心が私にはとても大切に思います。自分にはないから，強くなるように努力しようと思いました。

〇　今日全体学習で言えてよかったです。６時間目の時は，さすがにどうしようかと思ったけど，今日言わなかったら後で後悔することもできないんだと思って周りを見ると，クラスの子がたくさん手を挙げているのが見えたので，手が挙がりました。私が言った後で森口先生が言ってくれたのがすごくうれしかったです。私は言っている時，私は何を言っているんだろうとわけがわからなかったので，森口先生が言ってくれたのは本当にうれしかったです。後で言ってよかったなあと思いました。心がすっきりしました。でもこれは森口先生が言ってくれなかったら，半分くらいもやもやしていたかもしれません。・・・・私は板野町が好きだし，板中好きだし，３年生好きだし，３Ｂ好きだし，豊田先生や他の先生も好きだから，板中に来れて本当に良かったと思います。だから板野を板中を誇りに思いたいです。ここを誇りに思えなかったら，私の好きな３Ｂや先生は何なんだって。高校に入っても持ちつづけたい気持ちです。

〇　今日は最後の全体学習でした。私は，たったの１回しか発表できなかったけど，満足しています。今日で私は峠を乗りきれたと思いました。今まで自分の意見というのは持っていたんだけど，先生にあてられたら，ちゃんとはっきり言えるかどうか不安でしたが，今日，私も言ったら言えるという自信が持てました。だから，これをきっかけとして，これからも発表していこうと思います。

〇　僕はこの授業に参加して，３年Ｂ組というクラスに誇りを持った。他のクラスの子からいろいろ言われてきたけど，そんなこと，もう何とも思わない。３年Ｂ組はどのクラスよりもいいクラスだと思う。公開授業のとき，僕が一つ思っていたこと。中学を卒業して高校に入ってまた卒業して，大学入ったり，就職したりする。それから多分ぼくは結婚すると思う。その時その婚約者が同和地区の人であっても，僕はかまわない。両親は反対するかもしれないけど，本当に好きな人だったんだからそんなもん関係ない。愛し合ってるんなら，それでいいと思う。その間に世間が入り込んでくるのはおかしいと思う。どんな事があっても正しいと思ったことは正しい。自分の信念はつらぬき通す。どんなことがあっても，僕はあきらめないし，くじけない。僕は３年Ｂ組のやつ，みんな好きだ。自分の考えを持ってないやつは一人もいない。みんな何か考えてる。いろいろ言われてきたクラスだけど，３年間すごしてきた中で，一番今のクラスが好き。ずっとこのままいられたらなあと思うときがよくある。問題の絶えないクラス

だけど，だれ一人友達を一人にしないし，またそれがいいところかもしれない。世間。みんなこれが悪いんだって言ってたけど，僕はそうは思わない。世間の中にはもちろん悪いことや間違ったこともあるだろう。でも，その中に正しいことがあるんじゃないだろうか。世間の中にそれを探すために，今学習してるんじゃないか。だから，ここで終わったらダメなんじゃないか。僕はそう思った。いろいろ言いづらいことを言った子もいるけど，明日からその子たちを一人にしない自信はある。絶対つながっていけると思う。今日の学習を終えて，何だかいつの間にか顔がほほえんでいたような気がする。

９．これからの自分

３Ｂの授業が終わり，生徒だけでなく私自身も，何かを得た思いである。私の心の中にずっしりと重かった同和問題学習の授業が軽くなった。軽くなったという表現が適切であるかどうかわからないが・・・・これも生徒たちのおかげである。信じ合い励まし合ってきたあの子たちを見て，教師である私が一段高いところから見下ろすのじゃなく，同じ位置に立って，同じ気持ちで考え，語り合うことを教えてくれたからだろう。

しかし，今となっては反省することが一つある。３Ｂの全体学習が終わってからは進学面で忙しく，同和問題学習の時間が充分とれなかったということだ。生徒の中には「もう全体学習しないの？」「先生やろうよ」という声があった。体育館でマイクを持ち，自分の熱い気持ちを発言することのすばらしさを生徒たちは感じとったのだと思った。

４月，この学年の配属が決まった時，森口先生と一緒だと知り，同和問題に関していいかげんな取り組みではダメだという気持ちになったのは本当である。森口先生は私にとって大きな大きな存在であった。彼から吸収できるものはすべて吸収しようと思った。しかし，あまりにも私がちっぽけすぎる。ほんの少しでいいから近づく努力をした。正直なところ森口先生が同じ学年でいたから，どうにかこうにかやってこれたのである。ふり返り反省してみると，私の場合人を頼ってばかりの同和問題学習であったように思われる。他の学校へ行っても，また一人になっても，この教育が続けられるような人間にならなくては本物ではない。今の自分にはまだまだ差別心がある。この差別心を洗いつづけることが，私に与えられた課題である。その私を３Ｂの生徒たちが見ているのである。３Ｂ３５名と一緒に歩んできたこの一年間を決して忘れることはないと思う。

３５名がこの３Ｂの教室から巣立っていく。ある者は高校へ進学し，ある者は職業訓練校へと進み，またある者は就職と，それぞれ進む道は違っても，全体学習で得た勇気と情熱と信頼を胸に，がんばってほしいと強く切望する。これから先，さまざまな差別の壁にはばまれることがあると思うが，板中魂で乗りきってほしい。私自身も教師という立場じゃなく，一人の人間として，差別に立ち向かっていかねばならない。一つの峠を越えたら，また一つの峠が待ちかまえている現代社会の中で自分を失うことなく，強い意志を持って進んでいくことが，私の大きな課題である。